

## サンクトペテルブルク宣言

EMECS11-SeaCoasts XXVI ジョイント会議のテーマは、「変動する世界における沿岸域・コミュニティのリスクマネジメント」である。

日本におけるコウノトリの野生復帰、1970年代に絶滅したがロシアから幼鳥がもたらされ今では90組もが生育するようになった例がある。

これが示すように、再生には時間がかかるものであり、しばしば国際的な協力を必要とし、それは効果を生むものである。このことは、特に閉鎖性海域のような生態系、すなわち、複数の国にまたがり、人口密度も高く、漁業、海運業などの重要な産業に利用され、また、大災害への脆弱性を伴うところでは、より重要であろう。

科学者、ステークホルダー、環境管理に携わる者、政治家などが関与し合うことにより、環境汚染は軽減できるものであり、環境は、修復、再生の長い道のりを歩み始めることができる。

例えば、50年以上も前に、科学者は、富栄養化と貧酸素水塊、藻場・漁獲高の減少とを関連付けた。科学者は、栄養塩負荷を低減することにより沿岸域システムが再生の道を辿り始めたことを示している。

このような変化は「里海」のような、科学者、ステークホルダー、環境管理に携わる者、政治家などが積極的に力を合わせている「共有されたガバナンスシステム (shared governance systems)」に適応したシステムのみに見ることができる。加えて、バルト海のフィンランド湾、黒海、日本海、北極海のような大規模閉鎖性海域において、新たな国際協力をより緊密に構築することが、我々が直面しているグローバルな課題の解決に導いてくれるであろう。

この再生ネットワークは、これまでに増して強固になって来ている。しかし、新たな脅威も生まれて来ている、そのためには国際的な協力が必要であり、我々は目が離せない。地球の温度上昇の度合が高まり、それによって北極海の氷塊が溶けて海面上昇を引き起こし、風や海流も変化させて、洪水も頻発している。また、インフラや人の健康・安全も脅威にさらされている。加えて、マイクロプラスチック、海の酸性化、有害な赤潮などが我々の注意を喚起している。これは、我々が重要な手立てを打つまでに、更に50年もかけられないことを意味している。

よって、我々は、次の通り宣言する。科学者達は、課題を発見した時点から、コミュニティが協働して効果的な取り組みを始めるまでの時間を短縮するよう共に努めなければならない

ない。そうすることにより共有されたガバナンスシステムがより功を奏するだろう。

このことは、若者や声を上げにくい立場のステークホルダーの新たなパートナーシップと教育のネットワークを求めている。それには、ローカルレベル、地域レベル、国際レベルのコミュニティを巻き込み、素早く対応するためのガバナンスモデルの強化が必要となる。ここまで我々は、大きく進歩してきた。しかし、これからは、世界が現在経験している変化の速度に遅れずに適応していかなければならない。